

宗教改革者フス チェコ

澄み渡った青空の下、中世の趣を残すプラハの旧市街広場の陽だまりは、市民の格好の憩いの場になっている。広場の中央には昂然と胸を張った宗教改革者フスの大きな立像が建っている。

フスは日本の世界史の教科書にも宗教改革者として掲載されている強い信念を貫いた偉人である。中世キリスト教の世界は、我こそ教皇なりと三名もが名乗りを上げ（教会大分裂＝シスマ）、さらには神の許しを金で買う（免罪符）などキリスト教社会は混乱と墮落の極みにあった。



旧市街広場ティーン教会前に建つフスの像

フスは聖職者としての純粋な気持ちから、これを正さねばならないとの信念に燃え活力あふれる行動をとった。

これまで利権を甘受してきた教会関係者には耳の痛い話で、折に触れフスに翻意を迫った。しかしフスは改革の主張を曲げず、おのれの意見を翻すことなく遂には破門されてしまう。そして1415年残酷な火刑に処せられたのである。

ヤン・フス

宗教思想家のフスは、（1369年頃～14

15年7月6日）プラハから75km離れたボヘミア北部のフシネツで生まれ、幼少期を貧しい生活環境の中で過ごした。フスは教会で奉仕活動をしながらか計を支えた。当時チェコはオーストリア帝国領で公用語はドイツ語であった。

14世紀後半、オックスフォード大学のウィクリフはカトリックの教義と聖書が乖離していると批判したが、これにフスが共鳴しウィクリフに心酔し以後のフスの揺るぎのない宗教改革への理論構築の基盤をなした。

フスが改革せねばならないという強い信念を抱いた背景は、教会の蓄財や聖職者の職権乱用、教会の権威を守るためのご都合主義的な行動、加えて40年間も続く三教皇の並立（ドイツのヨハネ23世、フランス・アビニオンにいるベネディクト13世、ローマのグレゴリウス12世）等々、キリスト教社会にはびこる弊害や不満が信者の間に満ち溢れた世相を何とか正さねばという強い義務感からであろうか。

フスが強く反対した免罪符は、十字軍の費用捻出のため、あるいは教会の改築費用、さらに罪は神の許しを得るべきはずなのに免罪符を金で買うことで罪は軽減され許されるとして教会が売買を始めたのである。

フスは1402年プラハ大学で神学を教授、ついには大学トップの学長に就任した。だが改革の主張を繰り返すフスに対し、1411年カトリック教会は彼を破門し異端審問、宗教裁判にかけたのである。

1414年ドイツ皇帝の提唱でコンスタンツ会議が招集され論争した結果、ローマ教皇を唯一正当と認めようやく教会分裂に終止符が打たれた。

1415年6月フスの初公判が開かれた。フスの聖職は剥奪され教皇に破門されるも彼は考えを改めず何度も説を撤回するよう求められたが死を覚悟しながら拒絶し続けた。そして遂に1415年7月6日火刑に処せられた。遺灰はライン川に投げ捨てられた。火刑に処せられるときフスは悪魔を描いた紙帽子をかぶせられたスケッチが今に残っている。

フスの主張がその後の宗教界の腐敗に対する改革の大きなうねりとなって100年後のマルチン・ルターやスイスのツヴィングリやカルヴィンの宗教改革活動へとつながっていった。

時が流れ、1999年ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は深い悲しみ、道義的勇気、深い後悔といった言葉を連ねフスに語り掛けている。

フスはチェコにおいて生前は使徒として尊敬を受け、死後は聖者殉教者として尊敬を受けている。フスの言葉「真実は勝」は、チェコの国民の心の拠りどころであり、1920年チェコスロバキアが独立すると国の標語となる。そして現在のチェコの大統領の旗に使われている。